

# これからの技術開発をめざして



執行役員

荻原 哲次

Tetsuji Ogiwara

21世紀とともに始まった第3次中期経営計画も初年度がまもなく終わろうとしています。一昨年のIT景気から急転直下、かつて経験したことのない不況が国内外に降りかかり、当社においても例外なくこの洗礼を受け、大きな変革を余儀なくされています。

景気に左右されることなく、メーカーはたえず新しい技術の追求と新製品の開発を継続していかなければなりません。クーリングシステム、パワーシステム、サーボシステム、コントロールシステムの各事業部から2001年の技術成果が報告され、本号にて紹介されることとなりました。ここに掲載された技術成果は、それぞれのテーマに取り組みられた関係者の1年間の努力の結果であり、新たな付加価値が期待される新製品として市場に投入されております。また、当社の貴重な財産として受け継がれていくものと確信しています。

日本において製造業の空洞化、すなわち生産拠点の日本国内からの撤退と生産コストの安い海外への移転を憂慮する声が聞かれてから久しいものとなります。かつて日本が高度成長期に米国を追いかけたように、現在は日本が中国などに追われる立場となっているのが現実であります。国内の製造メーカーは価格競争に対応して部材の調達や生産拠点を海外に求め、当社においても東南アジア地域を中心に海外生産への展開がされております。今後もこの傾向は拡大されていく方向にあるでしょう。

このように私たちを取り巻く環境が変わっても先へ進まなければならないのが技術です。当社においては未来志向をめざす技術が当社の精神として受け継がれています。国内だけでなく海外の競争相手も含めて真似の出来ない高い技術の追求と、これに挑戦する姿勢が実現への第一歩です。これらを実現することにより高付加価値製品が生まれ、グローバル化にも対応出来るものとなります。

市場競争に負けない、強い製品を実現することは決してたやすいことではなく、日々の地道な努力、積み重ねが必要です。常に先を見据える目と、思考と、行動が求められます。また、新しい技術、製品を開発するには現在、過去の技術、製品をよく知ることも重要です。当然のこととして将来どうあるべきかを考えて最新の先端技術を駆使することはいうまでもありません。

---

過去の技術を理解しておくことの意義として、論語の「温故而知新、可以為師矣」という言葉があります。日常よく使われることわざですが、「古い事柄もよく知っていて初めて人の師となるにふさわしいの意」であり、言い換えれば「過去の事実を研究し、それをもとにして新しい知識や見解を得る」です。先人の残してくれた技術、成果はこれらを理解してこそ新たな創造が出てくるものと考えます。

ITの進展は、かつて私たちが多くの時間を費やして入手した情報を素早く、しかも容易に引き出すことを可能としました。また、設計・開発などで使われる複雑で難しい計算やシミュレーションなども、小型で高機能のパーソナルコンピュータの出現やソフトウェア技術など支援ツールの驚異的な発展により誰もが扱えるレベルになってきています。私事になりますが、20年前の無停電電源装置の設計はすべて手作業による計算と過去のデータのみが頼りであり、経験則に基づいたものでありました。したがって、現在よりもはるかに多くの失敗とむだな時間を浪費したものであります。これに比べて今日では格段のスピード化と、精度が得られるようになってきています。

新規技術開発を伴う製品は目に見えない要素を多分に含んでいますが、他に先駆けてタイムリーに完成がされなければ意味のないものとなり、市場への投入が急がれます。人それぞれ個性があるように、手法もいろいろあるでしょう。共通して言えることはあるべき姿を描いた未来志向です。

今年度、開発テーマの推進に新たな発想と取組みがされようとしています。

技術者には夢があります。あるべき姿は、理想は、目的は、これらに挑戦して実現していくためには先ず行動です。2001年度の技術成果を踏み台にして上の目標に挑戦し、さらに一步先へと夢を実現に近づけて行けたらと思います。